

百合。二輪

相対速度

みどりい

何故五限に数学をやるのか、それが分からない。暗唱させられる公式は、どこか遠い国の言葉のように聞こえる。一年の後半から諦めた数学のノートは空っぽで。ただ、早く、帰りたいかった。

『帰りたい』

ノートの一番上。0.3mmの圧力を感じつつ、流されるようにただ書いて。

頃合いかと仰ぐ時計は、秒針だけが忙しなく動いていた。

「はあゝあ。さむ……」

黒い手袋をはめ、赤いマフラーを首にしっかりと巻きつけながら、昇降口を出て、駐輪場へと向かう。

寒いのは、苦手だ。身体が上手く動かなくて不快だし、なにより、寒いことそれ自体が不快だ。冬が好きなのは、虚勢を張っているだけか、それともなにかが壊れている。その二つ以外、あり得ないだろう。

ようやくたどり着いた駐輪場から、私のものはすぐに見つかった。

親戚のお下がりの原動機付自転車。クリームの塗装が薄くなって、見るからにみすぼらしい。

鍵を取り出すために、重いリュックを肩から下ろして。上着のポケットの中。スマホが震えた。

『校門で待ってるね』

原付を押して歩くと、目立つ。女の私がバイクに乗っているのが、そんなに珍しいのだろうか。

どちらにしても、もう、慣れた。

それに、私の注意は校門前。手を振るその姿だけに、注がれた。

「おーい」

「はい、はい。先輩、こんにちはー」

「先輩に向かってなんだ。その口のきき方は」

先輩がおどけてそう言うのを聞き流して、鍵穴に鍵を押しこむ。

「あのー……わたしも乗せてくれるんだよね？もちろん」

「可愛い後輩を、とても面倒な目に合わせる可能性があるあるという事に対しての覚悟があるのなら、どうぞ」

鍵を引き抜いて見せると、先輩は腕を組んで大儀そうに深く頷いた。

「いや、免許取って一年経たないとダメなんだっけ？二人乗りは」

「昨日もおんなじ話、しましたよ」

鍵をポケットに突っ込んで、原付を押す。最初は鈍く、だんだんとタイヤが回り始める。

「あと半年か……夏休みどっか連れてってよ」

「受験勉強、あるでしょう」

「うげ」

いかにも嫌そうに、顔をしかめる先輩の横顔を見る。

こんなでも成績優秀なのだから、分らない。いつも模試の結果を私に見せびらかしては嬉しそうにするのは、流石に子供っぽいと思いますよ、先輩。

「なに、何か良いことあったの？」

「なにも？」

「うそだあ。うそだね」

「はい、はい」

学校から駅までの道程は、見慣れた景色だった。免許を取ってからも、それは変わらない。

ただの、通り道。

本当なら、原付でさっさと通り抜けて、家に帰って、柔らかいベッドにダイブしたかった。

それでも私がこうして歩くのには、それなりの事情があるのだ。

歩道は狭くて、原付を押して先輩と歩くには窮屈だ。異様に安い自販機があつて、先輩は決まって毒々しい緑色のメロンソーダを買っている。名前も覚えていない寺があつて、先輩も興味がなさそうに通り過ぎる。古いコンビニがあつて、先輩と買い食いを何度もする。それは、きつと、次の夏までは続いていくのだろう。少なくとも、私はそう思っている。

原付はやはり、重い。当たり前だ。決して、押して歩くためのものではない。ある程度慣れたとは言え、筋肉の少ないこの身には重労働だった。

だから、先輩の歩調に追いつこうとすれば、呼吸は浅くなつて。心臓は勝手にその鼓動を早める。そして、不快な寒さも、元から無かつたかのように。

内側から、熱い。

「で、結局。具体的にいつから二人乗りできるの？」

「そもそも、するとは一言も言っていないですけど」

先輩は、やっぱりいつものように、子供のように笑つていて。

「え、いいじゃん。卒業するまでに先輩への恩返しだと思つてさ」

「先輩、返して貰えるほどの恩を私に売りましたか？」

「それはもう、たくさん」

先輩の、やけに自信のあるその顔が、なんだかおかしくて。

「ふふ、もう、分かりましたよ。行きましょう」

「ん〜どこ行こうか？どこがいい？」

「気が早いですよ」

本当に、先輩はいつも気が早いのだ。原付を押しているようでは、ついていけない。

まあ、だから。後ろに乗せてあげるといのは、丁度いいのかもしれない。

柔い

「ちーちゃん、これ、どうやるの？」

「ん。見して……どこ？」

「ここ」

文が指さしたところに目を通す。間違っている文章を、正しい形に直す問題。まあ、文には少し難しいかもしれない。

「えー、つと。My sister has……」

「ふむ。分かりましたか？」

「うん、これは since がついているじゃない？……ほら、」

私が指をさすと、文は隣でうんうんと首を振る。シャペンの後端を下唇に当てているのは、いつもの文の癖だった。

「だからこれは現在完了進行形になるのね。いい？」

「……うん」

「……ほんと？」

「……んー……ふふふ、へへ」

「へへ、じゃなくてね」
文が可愛らしく笑う。

うん……かわいい。いや、そう。可愛いのは良いのだけど、それはそうとして、できるようになってもらわなければならぬ。思い出す。

『ちーちゃん！ ちよつとこれ、ヤバい!! かな!!』
赤点ギリギリの答案。持ち主の緊張感のない顔。声。

「ああ〜一回休憩しよ〜」

「ん、じゃあ二十分ね」

「ん〜」

文はごく自然に私の肩に頭を乗せると、私から見える位置でスマホを弄り始めた。

「見えるよ」

「んー？ ああ。ちーちゃんに見られて、困るものないから」

ポチポチと独特の入力音が響く。どうやら、誰かにメッセージを送っているらしい。でも、誰に送っているかは分からなかった。そもそも、見ていない。

文の指はほっそりとしていて、爪も奇麗に整っている。その中でもひと際すらりとした人差し指が不器用に曲げられて、ゆっくり、慎重に動くものだから。つい、目まで追ってしまう。

「文」

「んー？ つあ、違う違う」

「指、奇麗よね」

「よし、よし……んー……ちーちゃん、私の指好きだよね」

「うん」

文のスマホを持つ方の手に、私の手を重ねる。文は特に動じることもなく、入力に苦心している。いつになったら、もつとまともに文字を打てるようになるのだろう。そう思うと苦笑してしまう。スマホの使い方も、改めて教えてやらなければいけないかもしれない。

「よっし！」

「お疲れ様」

どうやらスマホはもう済んだようなので、仕方なく握っていた手を離してやる。文は開きっぱなしのノートの横にスマホを置くと、伸びをして、余計に私に寄りかかってくる。

「……眠いー」

「寝たらだめよ」

「でも眠いー」

今日だって授業中寝ていただろうに。まあ、それはよくて……よくないけど。とにかく、どうしたものかと考える。本当だったら、寝かせてあげたいけれど。

肩に、重みを感じる。文の顔を見ると、もう、眠りに落ちる一步手前。

無防備な、蕩けた顔。

「キスしようか」

半分冗談。でも、半分は本気で投げかけてみる。流石の文も目をばちばちと何度か瞬かせて、怪訝そうに見つめてくる。

「……ん？ ……起こすために？」

「起こすために」

「んー……良いけど……でも、それちーちゃんがしたいだけでしょ？」

「でも、起きるでしよう？」

「まあーねえー……」

間延びした声を発しながら、文はずるずると私の肩からずり落ちて、私の膝に遠慮なしに頭を乗せてくる。

こういう時の文は大体恥ずかしがっている。恥ずかしがって、逆に無防備な姿を晒すのは、照れ隠しなのだろう。

頭を撫でてやると、下からじつと私を見上げてくるので、少し意地悪をしてやりたくなつて。

「ほら、休憩終わるよ？」

そう言うと、文はまたか、とでも言いたそうな顔をして。

「……よくない。そういうの」

私が笑いかけると、文はゆつくりと目をつむる。抗議するように閉じられた唇に、そつと。